

Title	キルケゴールによるアンデルセン批評の歴史的背景： 処女出版「いまなお生ける者の手記より」について
Sub Title	Der historische Hintergrund Soren Kierkegaards Kritik uber H. C. Andersens Gedankengang : um Soren Kierkegaards Erstlingsschrift: "Aus eines noch Lebenden Papieren, Gegen seinen Willen herausgegeben von Soren Kierkegaard. (1838)
Author	大谷, 愛人(Otani, Hidehito)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1961
Jtitle	哲學 No.40 (1961. 10) ,p.69- 112
JaLC DOI	
Abstract	<p>Diese Afhandlung stellt sich die Aufgabe, die grundlegenden Motive S. Kierkegaards Erstlingsschrift: "Aus eines noch Lebenden Papieren. Gegen seinen Willen herausgegeben von Soren Kierkegaard. Uber Andersen als Romandichter Mit standiger Rucksicht auf sein letztes Werk: Nur ein Spielmann." (1838) durch die Untersuchung ihrer literarischen Bildung und ihres historischen Hintergrund nachzuweisen. Diese Erstlingsschrift ist dem sonderbaren Schicksal untergeordnet: sie lasst sich ihre eigene wichtige Bedeutung bei den meisten Kierkegaard-forscher. Sie anerkennen in der Gedankengang dieses Werk kein Verhaltnis zu S. Kierkegaards nachfolgende Gedankengangs Entwicklung. Aber wir haben auch einen ganz gegensatzlichen Forscher, der dieses Werk fur wichtig halt und hierin ein tiefes Verhaltnis zu S. Kierkegaards nachfolgende Gedankengangs Entwicklung fand. Und eben diese Sache, dass dieses Werk zwei ganze geggensatzliche Auffassungen uber sich selbst hervorbringt, verhalt zu seiner eigentlichen Problematik. Diese Problematik lasst uns die Notwendigkeit der aus verschiedenen Gesichtspunkte grundlichen untersnchung uber diesem Werk fuhlen. Auf welche Weise soll man diese Arbeite vornehmen.? Ich abteile diese Untersuchung in drei Gebjete: der historische Hintergrund, die literarische Bildung und der Gedankengangsinhalt. Aber in dieser Abhandlung beschafte ich mich mit die Problem des historischen Hintergrund und der literarischen Bildung. Diese Abhandlung wird dem Zweck untergeordnet, den geistesgeschichtlichen Situation in 19 jahrhundert in Danemark aufzufassen, und ist ein vorlaufiger Versuch, Soren Kierkegaards Gedankengang unter der geistesgeschichtlichen Beleuchtung aufzufassen.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000040-0069">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000040-0069</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# キルケゴールによるアンデルセン批評の歴史的背景

——処女出版『いまなお生ける者の手記より』について——

大 谷 愛 人

キルケゴールは一八三八年九月七日、彼が二十五才のとき、如何にも謎にみちた題名の著作を出版した。それが“*Af en endnu Levendes Papirer, udgivet mod hans Vilje af S. Kierkegaard. Om Andersen som Romandigter, med særligt Hensyn til hans sidste Værk* ≧*Kun en Spillemand* ≧” (1838) 「いまなお生ける者の手記より——筆者の意にそむいて、S・キルケゴール刊行——小説家としてのアンデルセンについて——彼の最近作『しがなひ胡弓弾き』をたえず顧りみつゝ」(一八三八)であつた。これは彼の処女作品であつた。勿論、この著作の以前にキルケゴールは評論風のもの何回か雑誌にのせており、その中でも、一八三四年十二月、J・L・ハイベルクの主宰する雑誌“*Kjøbenhavns flyvende Post, Interimsblade*”に掲げた「婦人の地位」に関する文章は有名なものであるが、それ等はいづれも単行本としての体裁をとつたわけではなかつた。

さて、この著作は不思議な運命をもつてゐる著作である。というのは、この著作は処女出版という性格から、キル

ケゴールが自分の思想の基本的構図を世に訴える筈のものであり、又これによつて世にデヴェューすることが意図されていてもよい筈のものでありながら、従つて極く一般的に考えても、キルケゴールの思想を研究するにあたり、最も重要視されて然るべきものでありながら、実際には、キルケゴール研究者の大部分は、この著作を等閑に付しているのである。その理由は、この著作は、後のキルケゴールの思想の発展と何等関係をもたない、という点にある。この問題に関し、キルケゴール研究史に即して例証を挙げて見よう。キルケゴールは、言うまでもなく、同時代の人々の非常な関心をひきつけ、その彼の波紋は、彼の死後も止まず、おびたゞしい数の評論、論文の類が彼に対して投げられた。然し乍ら、彼の思想も生活も、全くカオス的で、複雑をきはめた構造をもち、而も秘密に充ちた偉大なスケールのものであるため、彼の人間としての全存在、思想の全構造を秘めた全著作をどう把えてよいのか、この問題に対してだけは、デンマーク本国の人々も、彼の死後三十年間も、手をつけずにいたのである。然しこのような彼の存在と全思想に兎に角、鮮明な輪廓を与え、それを正確容易に理解する必要が差し迫つて起つて来たのは、彼を血と肉によつて知らないのに彼の思想的影響だけが強烈に及んでいたデンマークの近隣諸国であつた。一八八〇年、スエーデンでW・ルーディンが、この必要に依えて、キルケゴールの人物と全著作についての本格的な著作を刊行した。これが W. Rudin: Sören Kierkegaards Person och Författarskap. Ett Försök. Stockholm (1880) W・ルーディン著「S・キルケゴールの人物と著作活動、一つの試み」であつた。キルケゴールの全著作についての本格的な書物の一番最初のものがデンマークの語ではなく、スエーデン語で書かれたということはキルケゴール研究史に於て実に興味ある事実である。しかしルーディンはこの書物の中で、「いまなお生ける者の手記より」を殆んど問題にしない態度に出た。彼は次のように言っている。「この著作は、キルケゴールの本来的な著作活動の外で書かれたもので

あるから、我々はこの著作に詳細に立ち入る必要はない<sup>(註1)</sup>」と。このルーディンの言葉は、以後ほんの僅かの例外は別として殆んどすべての研究者の態度を決定したようである。この意味に於ては、ガイスマールもブランド Frithiof Brandt (1892—1945) も同一線上にあると言えよう。ブランドの立場は非常に徹底しており、彼は、この著作の文学史的背景を凡そ人間のなし得る限りの綿密さをもつて研究し、それを彼の名著 *Den unge Søren Kierkegaard. København* (1929) 「若きS・キルケゴール」の中で展開しているが、而も、思想内容そのものには殆んど触れておらず、この問題に関しては、この著作とキルケゴールの思想的発展や実存の展開との間には、何の関係をも見出すことは出来ない又この著作の中に理念や精神を見出すことは出来ない、<sup>(註2)</sup>と言っている。

然し乍ら、ほんの少数の研究者は、全く例外的に、この著作の重要性を認めている。例えば、前述のルーディンのあと約十八年後、デンマークで、同じような試みの著作が書かれた。それはローセンベアウの書である。P.A. Rosenbergs: *Søren Kierkegaard. Hans Liv, Hans Personlighed og Hans Forfatterskab. En Vejledning til Studiet af Hans Værker. København* (1898) 「S・キルケゴール・彼の人生・人格・著作活動。彼の著作研究のための導き」彼はこの書物の中で、多くのキルケゴール研究者が、「いまなお生ける者の手記より」とキルケゴールの全生涯との間に何の関係も見出していない事実をとりあげ、自分はその様な見方に反対する旨を述べ、この著作の中には未<sup>(註3)</sup>来のキルケゴールの萌芽が充分に見られるとなし、五つの萌芽を指摘している。これは実に驚くべき出来事である。しかしその態度は、この著作の研究を捉すという積極的なものではなく、あくまで指摘にとどまっているのである。この著作を重要視する立場に関する限り、ヒルシュの見解は決定的な強さをもっている。ヒルシュはこの著作を重要視する事実上の唯一の学者であり、且つ、その根拠は並々ならないものである。彼は E. Hirsch: *Kierkegaard* =

Studien (1930) の中の六〇頁分をこの著作にあてゝいる。ヒルシュがこの著作を重要視する度合いは、信仰のように強固なものとなつてゐる。そしてその強固さは、この著作の意味を認めようとする研究者をして、どうしても彼の立場に立たざるを得ない程の引力をもつてゐる。

さて、こゝに於て我々は、この著作の眞の問題点に逢着する。即ち、この著作の問題性は、この著作に関し、前述のような、全く相反した二つの態度を成立せしめてゐる、という点にこそある。従つて、この著作の重要さは、ヒルシュの見解ともまたちがつた意味に於てあるわけである。私はそのような意味に於てこの著作を問題としたいと思う。従つてこの研究をすゝめるにあつて、ヒルシュとは全くちがつた方法をとるのである。この著作研究の方法として次の三つの部門に分けられるのが妥当であろう。

- (一) 歴史的背景
- (二) 文学的構成
- (三) 思想的内容

しかしこの論文では紙数の關係上第三の思想的内容ははぶくことにする。従つて第一番目の問題と第二番目の問題だけを対象とする。但し論述の都合上、(一)文学的構成、(二)歴史的背景の順序をとることにする。尙お、この研究を遂行して行くにあつての基本的な視点は、十九世紀ヨーロッパ精神史との關聯のもとに成立してゐる十九世紀デンマーク精神史の照明のもとにキルケゴールの思想を把えようとする視点で、即ち精神史的視点である。

註一 W. Rudin: Sören Kierkegaards Person och Författerskap. Ett Försök. Stockholm. (1880) S. 26.

註二 Frithiof Brandt: Den unge Søren Kierkegaard. Kjøbenhavn. (1929) S. 124.

## (一) 文学的構成

### 1 標 題

「いまなお生ける者の手記より——筆者の意にそむいてS・キルケゴール刊行」。この標題は何としても不思議な謎を秘めているよう思わせるものである。これは著者の単なる勿体ぶつた言い廻しではなく、それには著者の深い要求と謎とが秘められていることが予想される。研究者達はこの謎をどう見たのであろうか？

ブランドス Georg Brandes (1842—1927) は「この標題は、人生の幸福を失つて自殺を試みたり、或はそれに類することをした者が再び立ち直つてものした自伝を思わせるが、著作の内容自体は、つい出版されたばかりのH・C・アンデルセンの小説『しがない胡弓弾き』に対する殆んど類例を見ない程の破壊的な批評を内容としているところの、小説家としてのH・C・アンデルセンについての描写以上のものではなく、又それ以下のものでもない。」<sup>(註1)</sup>と言つており、この標題の意味を無視しているが、彼の最初の直観は見事にこの秘密に的中していると考えられる。この標題は恐らくキルケゴールの自殺の問題と関聯があるのではないかと思われるのである。ではどの様に関聯しているのか。

多くの研究者は、この標題をヒルシュの説に従つて解釈している。即ち、キルケゴールの父親は、次々に子供達に死んで行かれた。彼はしばしばキルケゴールともこの事を語り、やがてキルケゴールも父をのこして先きに死ぬだろう、と予言していた。しかし、事情は予言の通りではなかつた。この著作が一八三八年九月七日に出版される一ヶ月前、父親の方が死んだのである。而も、父親が子供達の死に言及する場合、そして又自分の長命に言及する場合、一切を宗教的罪の問題に関係づけた。そして父親はそのような宗教的絶望から全き光である神の愛を求めていたのである。これのみが人間の生を支えはげますものと考えていたのである。<sup>(註2)</sup> さて、キルケゴールのこの著作が、標題と言い内容と言い、正しくこの父親との会話に関係あることは、充分理解出来る。そしてこの見方が定説となることも当然であろう。然し我々はこの問題を更に進んで究明して見なければならぬ。キルケゴールの少年時代と青年時代の研究者キェール Seire Kihl (存命) はヒルシュとは少し異つた角度からこの問題をとりあげる。彼はこの標題が一八三八年一月九日の日記の記事に関係があると言う。<sup>(註3)</sup> その記事は次の通り書かれている。「私は人間の位格というものを端的に示す一つの言葉を探し求めていたのだつた。私は人々が私の考えをきつとそれぞれうけ容れてくれるだろうことを確信して、人間の位格というものについて書きたいのである。ところが私は今ルカの表現の中にその言葉を見出した。それは *καρτερικοί* (私の様に死んでいる者) という言葉である。私はこの *καρτερικοί* という一冊の書物を出版したい。<sup>(註4)</sup> このルカ福音書の言葉は、その第十五章三十二節の言葉と考えられる。これは有名な放蕩息子の譬話のところで、家を離れ遠くへ行つて死んだと思われた弟(息子)が家へ帰つて来て父親が喜ぶ場面である。次のような言葉である。「しかし、このあなたの弟は、死んでいたのに生き返り、いなくなつていたのに見つかつたのだから、喜び祝うのはあたりまえである。」このようにキェールの見方は、この記事のうちにある「死んでいたのに生き返り」

という言葉が日記に書かれていることから、そしてキルケゴール自身そのような書物を書きたいと言っていることから、この記事がその著作に関係がある、と見たわけである。この見解に対して我々が異議をとねる理由は全くない。しかしながら、この「死んでいたのに生き返り」という言葉に関係がある「私の様に死んでいる者」という言葉は、実際にキルケゴールに於てどんな意味をもっていたのだろうか。この意味は、単に父親の予言に反して生きのびている、という意味ではなからう。一般的に予想されることは、彼の実存的内面性としての絶望が神の愛による新生の光に接した、という事柄であるが、問題は、その絶望が具体的に何を意味するのか、ということである。このことこそ、ブランドスが最初に鋭い直観を与え、ホーレンベルク Johannes Hohlenberg (存命) が究明したところのキルケゴールの自殺計画に関する事柄であろう。ホーレンベルクは、キルケゴールの友人エミール・ポエーゼンが、このキルケゴールの著作刊行の前年、キルケゴールがもっていた自殺計画を思いとどまらせた事実を指摘している。<sup>(註5)</sup> キルケゴールはその計画を思いとどまり、著作出版の約二ヶ月前、即ち、一八三八年七月十七日にはエミール・ポエーゼンに宛て、次のような書き出しの手紙を送っている。「愛するエミール、僕の唯一の友なる君よ、僕は全く色々な意味に於て僕には耐えられないこの人生を、君の執成しによつて耐えて来たのだ。——」<sup>(註6)</sup>と。我々は彼のその著作を通し彼の死にも狂いの生の叫びを聞く。その叫びは次のように言っている。「僕はいまなお生きている、君達はいよいよこれからその事情を僕から聞くであろう」と。<sup>(註7)</sup>そしてこれがそのまま標題になつている、というのがホーレンベルクの見解である。

以上この標題に関する研究者の代表的見解を挙げたわけであるが、これは単に父親の予言に関係するだけでなく、それは正に自殺計画とも関係していると思われる。即ちこの標題は単に生物的・自然的に生きのこつていいるというよ



うな意味でなく、実存的決意のもとで「いまなお生きている」ということ、即ちあの日記の記事に引用されたルカ福音書のモチーフ「生き返る」ということ、これを意味していると考えられるのである。

さて、次に更に一つ説明を必要とされる言葉は「筆者の意にそむいて、S・キルケゴール刊行」という言葉である。この著作の形式の特徴の一つは、筆者がキルケゴールであると同時に刊行者もキルケゴールの名になつてゐることである。そして右の言葉の意味は、この著作の序文のところに明らかに示されている。然しこゝで注意すべきことは、その序文は筆者キルケゴールの序文でなく、刊行者キルケゴールの序文になつてゐることである。「同意があつても口論は止まらないものだ、と人はよく言うが、この序文で述べられてゐる同意だけは、少くとも、私が永い間この論文の著者自身と交わしてきた論争を中止させるのである。即ち、私はこの著者を、『舌と口とを以て心の底から』愛し、彼を私の真の友、第二の我 alter ego と真実に思つてゐるのに、而も私は、私と彼との関係を表わすのに、この alter ego と同じ意味に考えられているかも知れない別の言葉、即ち自分と同じという意味での第二の我 alter idem という言葉を使うことは出来ないのである。我々の関係は同じ者同志 idem per idem という意味での友人関係ではない。それどころか、我々二人は、殆んどいつも互いに意見を異にし、互いに闘い合つてゐる仲だつたのである。それなのに我々は、そのような条件のもとで、最も深く、神聖にして解くことの出来ない友情の絆によつて結ばれていたのである。然り、我々は、しばしば磁石のようにわかれていながら、而も厳密な意味に於ては別れていないのである。たとえ我々二人の共通の知人が、我々二人が一緒になつてゐるところを未だ曾て眼にしたことがないなどと言つたとしても……。詩人達や雄弁家達が昔から繰り返えし繰り返えし言つてゐる唯だ一つの言葉、『それは恰も一つの靈魂が二つの肉体の中に住んでゐるようなものだ、』という言葉のように、そして、我々の場合では『そ

これは恰も二つの靈魂が一つの肉体の中に住んでいるようなものだ、』という言葉で表わした方が適切であるように、我々は、友人同志として、互いに真正銘の一致をすることによつて得られる喜びというものを味わうことは全く出来ないのである。……私のその友人は、この人世というものに対し非常な不満を抱いているのである。その彼の不満のために、私はしばしば彼のことが全く心配になつたり、又、私の上気嫌が彼の不満をなだめ、彼のサウロ王のような病的気嫌をはらいのけてやるようなことが出来ないならば、彼も私も二人の友情そのものまでも悪化して来ることを恐ろしく思つたり、するのである。<sup>(註8)</sup>……」この著作の序文はこのように、キルケゴールの内部の二つの矛盾する自己の闘いを、刊行者S・キルケゴールと筆者S・キルケゴールの弁証法的友情関係として描いて行くのである。更に後の部分の要点を言えば、この友人キルケゴールは刊行者キルケゴールから、全く遠ざかり秘密の時をもつている。彼は人世と闘う一つの理念を獲得するためだったのである。このような状況のもとに彼は一つの論文を書く。刊行者S・キルケゴールはその論文を手に入れてしまい、出版しようとする。しかし友人キルケゴールは勿論いやがる。二人は再び議論をはじめ、言葉のやりとりを始める。仲々ちががあかない。然し刊行者キルケゴールは考える、理念という我が家をもたない議論のやりとりなぞ何の意味もないと。最早やそんな議論の言葉なぞ聞きたくないという思いになる。彼はもう敢然と議論を打ち切り、刊行を決意する。

以上が序文の荒筋であるが、これによつてこの著作刊行の意味がはつきりわかると思う。キルケゴールが自己の内部で続けて来た人生観上の、否、理念獲得のための果てしない内的闘いを兎に角一応打ち切り、その闘いを理念の型で外部へ展開し、打出したのである。

我々は、この「筆者の意にそむいてS・キルケゴール刊行」という著作形式の中に、やがて彼が自己の著作活動を

匿名著作と本名著作という著作構造の二重性によつて展開して行つたその方式の萌芽を見るのである。

## 2 文 体

この著作が書かれた一八三八年頃のデンマークは、文学手法として、正にイロニーの支配した時代であつた。このイロニーの師は言うまでもなくヘーゲル哲学の紹介者ハイベルク J. L. Heiberg (1791—1860) であり、キルケゴールも彼のサークルに連らなり、受けた影響は大なるものがあつた。一八三四年十二月、キルケゴールはハイベルクの主宰する雑誌 “Kjøbenhavnns flyvende Post. Interimsblade” に婦人の地位に関する評論を無記名で載せたが、その文体と云い、論理と云いハイベルクそつくりなので、読者達は、それを書いたのはハイベルクだと思つたのである。<sup>(註9)</sup> それから四年後にこの処女出版が出たわけであるが、この文体も明らかに同じ影響のもとにあることを示しているのである。一例を引かう。

Det Sublimat nemlig af Glæde over Livet, den som Livs = Udbytterende resulterende gennemkæmpede Tillid til Verden, at i den endogsaa i dens mest underordnede Skikkelser ikke Livs = poesiens Kilde er udtørret, den Tillid til Mennesker, at der ogsaa i disses mest trivielle Fremtrædelsesformer, naar man blot vil søge rigtigt, findes en Fylde, en Guddomsgnist, der, omhyggeligt pleiet, kan gennemgløde hele Livet, kort sagt den verificerede Congruens af Ungdommens Fordringer og Behudelser med Livets Præstationer, der her ikke bevises ex mathematica Pure, men anskueliggjøres de profundis, af et rigt Gemyts hele indre Uendelighed, og fordrages med ungdommelig Alvor—give disse Fortællinger et evangelistisk Anstrøg, der nødvendigtviis maa sikre dem stor Betydning for Enhver, der endnu ikke har forskrevet

sig til Fanden for at storme Himlen, eller praktisk = grundigt fordybet sig i Støvlerne, for der at finde Tivarelsens egentlige Reale, og gjøre deres Læsning til et i Sandhed opbyggende Studium. (註10)

「人生への喜びによる醇化、その様な人生の報酬として得られる信念、即ち世の中の凡そとるに足りない様態の中にも、人生の詩の泉は乾くことがないという世の中への不堯不屈の信念、もし人が素直に探し求めるならば、この世の中に平凡に現れて来る人々の中にも時の充実というものを、つまり、よく注意して見るならば、人生全体を輝かすことの出来る神性のきらめきを、見出すことが出来るという人間への信頼、簡単に言うならば、純粹数学では証明出来ないが、絶望の深淵からだけ、即ち無限に徹底的に内面化する真の情念によつてだけ感得せられ、且つ青年らしい情熱によつてだけ語り伝えることの出来る様な人生を成就して行くという事柄に青年の願望や使命を結び合せること——これ等のことどもは、この物語りに福音的な味覚をそえることだろう。そしてこの福音的な風味は、この物語りが、天国を激しく攻めとるために、未だ悪魔と提携していない人々や、或は又天国の現存在がその固有の仕方で見実化して行くその有様を見出すために、未だ實際的 || 徹底的には長靴 (|| 幸福の長靴の意味……筆者) をはいて熱心に訪ね廻らない人々すべてにとつて、非常に意味深いものとなることを、必ずや保証するに違いないし、又、それ等の人々がこの物語を読むこと自体が、真の意味に於ける教化的研究となるような働きをするにちがいない。」

この一例によつてもわかる通り、箇々の文章の長いこと、重くるしいこと、読む者をして本当に困惑させるのである。この著作の文体に関する批評はいづれも辛辣に満ちた皮肉なものであつた。

殆んどすべての批評家の一致している点は、この文体には凡そキルケゴール本来のものが表れていないということ、この文体は他人からの全くの借物だということである。

先づ同時代のヘアツ Henrik Herz (1798—1870) は、キルケゴールはこの著作の文体をハーマンからとり入れたらしい、ということを描し、次のように更に言っている。「ドイツ哲学の著作を書かうとする者は、それをデンマーク語で書くことは決して出来ない。そのようなことをすれば、その著作は、凡そデンマーク語自身が預り知らないところの意味の言葉で満ちるであろう。アンデルセンに就いてのキルケゴールのこの著作は、この中で展開されている哲学のためには本当はどんな言語を使つたらよいのかということを示唆しているのである。」<sup>(註11)</sup>と。ヘアツはこの様にこの著作の文体は凡そデンマーク語のそれでないこと、その理由はこの著作の哲学自体にあることを述べている。キルケゴールの学友の一人ホルスト H. P. Holst (1811—1893) は更にひどい皮肉を言っている。「私はキルケゴールの処女出版、即ちアンデルセンについての著作を読む際、その一字一字を書き変えたのである。いや、より正しく言うなら、それをラテン語からデンマーク語に翻訳したのである。……それは同時代の全く複雑した文章構造と分詞でみちみちており、ラテン語式デンマーク語で書かれているのである。」<sup>(註12)</sup>と。友人エミール・ポエーセンは、更に適切な表現をし、この文体はハイベルク版だと言っている。<sup>(註13)</sup>

この文章のまづきの根本原因は結局ハイベルク思想、論述の仕方の影響下にあつたことを意味する。このことは同時にヘーゲル哲学の支配下にあることを意味するのである。ブランドスはキルケゴールの文章・文体に関し最高の讃辞を投じている批評家の一人であるが、この著作に関する限り酷評を下している。「この小著は、如何なる意味に於ても、処女出版の著作としては決して素晴らしいものではない。試みに、この作品を他の人々の処女出版の作品と比較して見るとよい。私は、その処女作品に於て完璧であつたオエーレンシユレーガーやクリスチャン・ヴィンターと比較せよとは敢て言わない。ハイベルクやパルードン・ミューラーとの比較でよい。キルケゴールの著作はこの二人の

ものよりはるかに後退している。この著作の批評的試みは恐ろしい力をもっているにも拘らず……教義理論のため、そしてとくに神学的思想をひきずっている挿入語のため、そして又怪しげなヘーゲルの語調と形式でたつぷり飾られているため、殆んど読めたものではないのである。この若き著者は、ヘーゲルののどの中に座を占めている。彼は、無前提からはじめるという同時代の一般的傾向だけでなく、特にヘーゲルの論理の出発点をも、即ちギェルレンボーウ夫人の小説にある有無 *Varen* *Intet* という規定をも再発見している、と考えられるのである。……」と。キルケゴールの詳しい伝記作家ツローエルスルン *Troels-Lund* (1840—1921) も同じようなことを言っている。「この著者の後の進歩を知る現代の読者は、この著作の中に未熟さと約束された将来性との混合した印象をもつであろう。人はこの著作の形式と内容との両者を包んでいるおむつに気付いて全くいや気がさすであろう。長々としたヘーゲルの衣裳をひきづりながら、そして又教義と諧謔とをさも満足気にたばこの煙を口からふかしているようにふかしていることを思わせる文章である。この処女出版を、あの正に時と所を得て燃えた焰であり、且つ全く当を得た効力をもつたところの最後の著作『瞬間』に比較するなら、この両者のへだたりは何マイルあることだろうか。言語的見地からするならば、この著作の文体は、これ以前の彼の雑誌論文のそれより確に後退しているのである、」と。コペンハーゲン大学のデンマーク文学史教授ヤンセン *J. F. Billeskov Jansen* (存命) も、もし人がこの書だけを読むなら、この著者が言語というものに手馴れた人だとは到底思わないだろうと言っている。<sup>(註16)</sup>

右の引用から、我々はこの著作の文体に関する限り、非常にひどいものであることを認めてよいであろう。アンデルセンの自伝を見ると、当時人々は、この著作をはじめからしまいまで読んだ者はキルケゴールとアンデルセンだけだろう、と言っていたそうである。<sup>(註17)</sup> 否、この文章のよみにくさを感じたのは当時の人だけではない。勿論現代のデ

ンマーク人は、より一層よみにくさを感じている。私がこの著作のいくつかの文章を示して実験した何人かのデンマーク人はいづれもこの文章の意味をとるのに苦心をしていた。

さて、この様に悪評を蒙つたその文体の中にも矢張り彼の未来の萌芽は隠されてあつたのである。ブランドスは先述のような酷評をしながらもその萌芽は認めており、この著作の標題それ自体のうちに、キルケゴールがやがて後に展開したユーモアにみちたバロック的文体のきざしを見ており、キルケゴールをゴチック的天才と名づけている。<sup>(註18)</sup> 又

ブランドスはこの処女出版と最後の著作『瞬間』の文体とを比較して両者の中に見出せる共通点を指摘している。それは、両者が共に情熱的・攻撃的文体の著作であること、即ち前者はアンデルセンに対する美的——批評的攻撃であり、後者は時代精神と国教会に対して激情的攻撃であること、を述べている。そして両者を通じてあるものは、敬虔

Pietet と軽蔑 Foragt の二つである、<sup>(註19)</sup> と言っている。ローセンベアッは、キルケゴールは、ハイベルクを頂点とす

るデンマーク同時代の人々の誰よりもはるかに優れた地点にある、デンマーク散文文体の祖ブリッヒア S. S. Blicher (1782—1848) の文体に深い理解を示しているということ、又、この著作の問題究明の方法は、彼の全著作に見られる概念規定を次々と投じて文章を押し進めて行く方法の一番最初のあらわれであるということ、<sup>(註20)</sup> を述べている。即ちそ

の概念規定を次々と投じて行く方法というのは、例えば Andersen Mopfater ved sin Modsetning 「アンデルセンは反対に理解している。」 Andersen opfatter ved et Andet 「アンデルセンは別の事に理解している。」という仕方である。同じ仕方で次のような言語形式の場合もある。“Andersens Tilfaeldigheder” 「アンデルセンのきまぐれ」 “Andersens Overtro som Surrogat for Poesi” 「詩の代替物としてのアンデルセンの迷信。」

以上私はしばらくの間この著作の文体の特徴についてキルケゴール研究者達の諸説を中心として検討して来たが、我々は、一体どう理解したらよいのかということが問題となる。私見を述べれば、この著作の文体は確かに美しいものとは言えないし、デンマーク語的ではなく、或る一つの不消化な思想の論理に魅入られ、筆が硬直していることを感じさせる。然しそれと同時に、矢張りこの文体を通してキルケゴールの約束された将来がにじみ出ていることも事実である。さて、然しながら、私はこの文体を通して、そのような事柄とは全く別の一つの決定的に重要な問題を感じるのである。それは、この様に拙劣な文体のキルケゴールが、而もアンデルセンの文体に酷評を投げつけている点である。即ち、彼はこの著作で、アンデルセンの小説『しがない胡弓弾き』を批評しているわけであるが、その批評の一つは、アンデルセンには真摯な人生観が欠けているという点にむけられている。そしてその事実の証明として、この小説におけるアンデルセンの文体は人工的な虚飾にみちている、という点を指摘している。しかし、この時のキルケゴールは、ヘーゲルの論理とハイベルクの技巧に全く支配されたところの、矢張り人工的な虚飾に満ちた文章を書いていたわけであるから、文体に関する限り、アンデルセンと同じ状況にあつたわけである。そしてその同じ状況とは、更に根本的に言うならば、文体と思想の卑弱さなのである。キルケゴールがアンデルセンを酷評したのは正にこの一点なのである。しかしこの卑弱さは、当時キルケゴール自身が自分に感じていたことがらであり、彼はその頃正に強力なイデーとそれをそのまま表現する強力な文体とを獲得しようとしてつとめていたのであり、この著作こそ正にそれ等を獲得するための闘いの記録のようなものである。<sup>(註21)</sup>

それでは何故二人の同時代の天才が、文体と思想の卑弱さという同一の状況にあつたのだろうか。これには勿論色々な理由がそれぞれにある。それぞれ固有の実存的・内面的理由がある。然しそれ等を超えて更に共通の理由が言わ



れ得るとするならば、それは当時の歴史的状況に関係があるということである。それを更に具体的に言うならば当時の言語史的状况に関係があるということである。それは当時、ドイツの二つの大きな思潮、ロマンティックと観念論思想が、デンマークに押し寄せて来て、デンマーク全土の思想界を洪水のように覆つてしまつたのである。このことは結局のところデンマーク語自体をも同一の運命に立たせたのである。そこでキルケゴールもアンデルセンもこの洪水の真只中で、デンマーク本来的なもの、デンマーク語本来的なものを獲得しようとし、二人ともこの洪水に溺れかかつてもがいているわけなのである。「主体性」の獲得と言えば簡単であるが、それはこのような歴史的状況を背景としているのであり、キルケゴールのこの著作に見られる文体のまづき、その特殊性の背後にはこのような言語史的状况があるのである。

- 註1 Georg Brandes: Samlede Skrifter II. Søren Kierkegaard. En kritisk fremstilling i Grundris (1877). S. 270.
- 註2 E. Hirsch: Søren Kierkegaard = Studien. I. Gütersloh (1930). S. 49—50.
- 註3 Sejre Kühl: Søren Kierkegaards Barndom og Ungdom. København (1950). S. 125.
- 註4 Papirer. II. S. 245.
- 註5 J. Hohlenberg: Den Ensommes Vej. En fremstilling of Søren Kierkegaards Værk. København (1948). S. 232.
- 註6 C. Koch: Søren Kierkegaard og Emil Boesen. Breve og Indledning. Med et Tillæg. Kjøbenhavn (1901). S. 45.
- 註7 J. Hohlenberg: Ibid. S. 232.
- 註8 S. Kierkegaard: Samlede Værker. XIII. S. 49—50.
- 註9 F. J. Billeskov Jansen: Studier i Søren Kierkegaards litterære Kunst. København (1951), S. 14.
- 註10 S. Kierkegaard: Ibid. S. 61—62.
- 註11 Sejre Kühl: Ibid. S. 124.

- 註12 Troels-Lund: Bakkehus og Solbjerg (1922); S. 218.  
 註13 S. Kühl: Ibid. S. 125.  
 註14 G. Brandes: Ibid. S. 270.  
 註15 Troels-Lund: Bakkehus og Solbjerg. Træk af et nyt Livssyns Udvikling i Norden. København (1922). S. 217—218.  
 註16 B. Jansen: Ibid. S. 14.  
 註17 H. C. Andersen: Mit Livs Eventyr (1859). S. 170.  
 註18 Georg Brandes: Ibid. S. 270.  
 註19 Ibid. S. 271.  
 註20 P. A. Rosenberg: Hans Liv, Hans Personlighed og Hans Forfatterskab. En Vejledning til Studiet of hans Værker Kjøbenhavn (1898). S. 19—20.  
 註21 J. Hohlenberg: Ibid. S. 233.

—

## (二) 歴史的 背景

ここに云う歴史的背景とは、著作成立の歴史的背景という意味である。この著作の標題及び文体は勿論であつたが、我々の眼を更に内容自体にむけると、今更ながらこの著作の問題性の容易ならぬものであることが知らされる。というのは、この著作は、アンデルセンの批評であるが、それは、始めから終りまで、実に苛酷苛烈な攻撃にみ

キルケゴールによるアンデルセン批評の歴史的背景

ちみちているからである。一体、何故キルケゴールはこうまでアンデルセンを攻撃する必要があつたのだろうか？ 全く不思議である。というのは、アンデルセンは、今でこそ世界的に有名な人物となつているが、当時は凡そ将来性など感ぜられない、全く名も無い、而も非常に卑弱な存在だつたのであり、こんな男をどうしてあんなにまで徹底的に攻撃する必要があつたのか、而も自分の晴れのデヴューが託されて然るべき処女出版に於て何故彼を題材とする必要があつたのか、全く不明だからである。そこで我々は、この著作の成立理由についての根本問題の解決を次の設問に於て求めなければならないのである。「何故キルケゴールはこんなにまでアンデルセンを攻撃したのか？」著作の成立理由の根本問題を、単にこの設問にだけしぼることが妥当であるかどうかは確に問題であろうが、この設問は、その根本問題解決の大部分を背負つてゐることは間違いないことであろうし、少くともその解決のための重要な手がかりとなるであろう。

さて、この著作は、その成立理由に関しこの様な謎をもつてゐるから、この著作の成立理由をめぐつて様々な見解が生れたわけである。然しながら、それ等は結局のところ二つの決定的に相違した見解に分けられるのである。その一つは、この著作成立の理由を、キルケゴールと彼の周辺の人々との人間関係、及び思想交流関係に關聯づけて求めようとする見解であり、他の一つはそれを、キルケゴール自身の主体的・内面的・実存的状況に關聯づけて求めようとする見解である。この様にこの両者の見解は根本的に性格を異にした視点からのものであるから、私は、その一方によつて他方を否定するという仕方をとらず、両者を等しく検討して見る必要があると考える。そこで、私はこの両者の視点を、1 外面史的背景の問題、2 内面史的背景の問題という二つの問題に変様させて、検討をしたいと思ふのである。

## 1 外面史的背景

この視点に立つ研究者の主なものは、ツローエルスルン、ブランデス、ブランドトであり、こゝで最も問題となるのはブランドトの見解であるが、彼の問題の輪廓を一そうはつきりさせるために一応前二者の見解をも検討して見よう。

先づ第一にツローエルスルンの見解であるが、彼の見解によると、キルケゴールがこの著作を書いたのは、彼が恩師ポール・マルチン・メーラー Poul Martin Møller (1794—1838) の死後、メーラーがデンマークの思想界に占めていた地位をつぎ、言はば彼の後継者になろうとした動機からである、となしている。<sup>(註1)</sup> さて、メーラーは、この著作が出版される約五ヶ月前、即ち一八三八年三月十三日に死んだのであるが、彼がデンマークの思想界に占めていた位置は実に大きなものであり、同時代の青年、そして、又キルケゴールに対しての影響は非常なものであつたのである。そこでツローエルスルンは次のように言うのである。「キルケゴールにとつては、詩人としてのメーラーの位置を受け継がうとすることは、その時の彼の能力及び素質から見て、余りにも分に過ぎたものであつた。さりとして、メーラーよりもより偉大な哲学の著作を刊行することは、余りにも将来を見越したやり方であり、又、このことによつて、彼が今までに到達し得た自分の位置を失うことでもあつたわけである。ところが彼の模範者、先行者メーラーは、彼の行動自体を通じて、キルケゴールに、彼の行くべき道を示しておいてくれたのである。というのは、メーラーが、同時代に対し決定的な意味に於て貢献した仕方というのは、彼が(単なる詩人としてではなく、又哲学者としてでもなく) 実に文学作品の批評家 *Annelder af litterære Arbejder* としてなのであり、即ち、彼は、文学的作品の批評家として、同時代の明白なる自己理解の確立ということに貢献したのである。若きキルケゴールが、師メー

ラーに従はうとした点は、正にこの点なのである。」<sup>(註2)</sup>と。

この見解は、確に、キルケゴールの生存していたデンマーク特有の事情というものを非常にはつきり示してくれている。キルケゴールが一生を通じて同時代のデンマークになしたことは、正しく同時代の決定的な自己理解を促すことであり、彼のこの著作も正にその性格のものであつて見れば、メーラーとの関係をこのように理解することも可能かも知れない。然し乍ら、仮令この見解を受容れたとしても、先きに述べた設問「何故キルケゴールは無名卑弱なアハデルセンをあんなにまで激しく攻撃したのか？」という問いは少しも理解されずに残るわけである。

ところで、このツローエルスルンとは全く異つた側面からこの問題を究明しようとするのがブランデスの立場である。ブランデスは先述の設問そのものから出発する。彼は言う、「キルケゴールが、この世間に初めて登場してくるにあつて、この様に自分とは全く似つかわしくない同世代の一人の者に対し判決のおのを下さうとしていることは、運命の戯むれではなからうか。……一体、キルケゴールは、何をすき好んで、又何の名譽があつて、この憐れな凡そ防禦する力もないH・C・アンデルセンに一騎打ちをいどんだのであろうか？ この時代に於けるアンデルセンは、デンマーク文学史上に於ては、キルケゴールに立ち向う騎士どころでなく、狩人に追われている一匹の動物に過ぎなかつたではないか。この巧妙な蜘蛛にとつて、この憐れな一匹の蠅を、巢をめぐらして捕えたところでどれだけの喜びがあつたのだらうか？」<sup>(註3)</sup>ブランデスはこの様な問いを發し、次のように自ら答えている。「答えはこうである。即ち、アンデルセンのその小説に於ける根本思想は、キルケゴールの思想の根本的な生命に、決定的な打撃を与えたということ、そして、キルケゴール自身の内部と外的生活方式の中に見られる彼にとつての最善のものを煽り立てることによつて、彼を殆んど全人的に心痛させたこと、に帰因するものである。キルケゴールをとらえたものは何かと

いうに、それは天才というものについてのアンデルセンの教説であり、即ち、天才は周囲の者からの配慮と、愛情に満ちた環境とを、つまり果をむすぶための或る程度の暖かさを、必要とし、この様な支えがなくては天才は実らずに終つてしまふだろう、というこの怠惰な教説なのである、<sup>(註4)</sup>と。ブランドスはこの様に、この著作の成立の由来を、アンデルセンの教説それ自体の問題の中に見ているのである。

ブランドスの見解は、いかにも文学史家らしく、客観的な取扱い方の中に鋭い直観をのぞかせている。確に、キルケゴールの思想構造とアンデルセンの思想構造とは、所詮は、この著作の中で展開されたような構図で対決される運命のものであることは、充分納得される事柄である。然し乍ら、尙お不審な一つの点は、キルケゴールは、この著作の中で、単に教説への反撥以上に、アンデルセンの人格そのものにむかつて激しい攻撃の矢をむくいている事柄である。而もそのアンデルセンは全く無名な卑弱な男なのである。この事を考えると両者の間には教説以上の何らかの關係があつたことが予想され、ブランドスの解答も矢張り不充分と言わなければならぬ。然しブランドスは、たとえ間接的にはあつても、キルケゴールとアンデルセンの間に何か特有の個人的關係があつたことを暗示したことは、彼の大きな功蹟であつたと言わなければならない。

ところでこの著作成立の根本理由としてその二人の間の特有の個人的關係を問題とし、これを徹底的に究明したのがブランドスなのである。ブランドスは、ツローエルスルンヤブランドスと同じくデンマークの人であり、彼の著 *Den unge Søren Kierkegaard. København. (1929)* 「若きS・キルケゴール」は青年期のキルケゴール研究書として他に比類を見ないものである。彼はこの書物の中で二人の特有の個人的關係を究明しているのである。さて、ブランドスの見解はこうである。キルケゴールとアンデルセンは一八三六年—一八三八年の間個人的交渉があつたということ、

特に一八三六年—一八三七年の間は *Cafékliken* 「コーヒー仲間」と称する流行の尖端を行く文学者達の寄り合いに  
 両人は属していて交渉があつたこと、そしてこれ等の仲間達のハイベルク的なイロニーをふりまわす態度を甚だ不愉快に思つていたこと、特にキルケゴールの諷刺的な態度に傷心していたこと、そして一八三八年五月十九日、アンデルセンは *Lykkens Galoscher* 『幸福のオーヴァーシューズ (或は長靴)』という童話を刊行したが、これは明らかにハイベルク・サークルの諷刺で、とりわけそこではキルケゴールを一羽のオウムに仕立て徹底的に諷刺をしていること、キルケゴールのアンデルセン批評の発端は正にこゝにあり、彼のあの著作はこれに対する報復攻撃である、というのである。<sup>(註5)</sup> 即ち、ブランドは、著作成立の根本理由を、アンデルセンの童話『幸福のオーヴァーシューズ』をめぐつてのアンデルセンとキルケゴールの関係の中に見ているわけである。

先述の設問に対する一つの解答として見る限り、ブランドの見解は非常によく筋が通つていると言えよう。そこで我々は、こゝに更めて、アンデルセンとキルケゴールの関係を究明して見る必要がおこつて来るわけである。

さて、アンデルセンとキルケゴールの関係であるが、この問題に先き立ち、先ずアンデルセンとハイベルク・サークルの關係をつきとめておく必要がある。この關係は、デンマーク文学史の著作の中で、一般に理解されている通りのものである。<sup>(註6)</sup> 即ち、ハイベルクは最初この若いアンデルセンに親切な態度をとつていたのだが、徐々にアンデルセンを問題にしなくなつてしまつた。一方アンデルセンの方は一八三〇年代にはずつとハイベルクのもとに通い続けていたわけであるが、結局そこでは何等よいものを見出すことが出来ず、全く下らなさを感じて来たのである。そしてハイベルク・サークルの連中が矢鱈にイロニーをふり廻すその批判癖やハイベルク自身のデーモニッシュな性格に、アンデルセンは内心非常な抵抗を感じたのである。<sup>(註7)</sup> しかしアンデルセンはやがてその様な抵抗及び憤慨を巧みな仕方

で外部へ表現する機会をもつたのである。それがどんな方法でなされたかについてはすぐ後に述べるが、彼がそれを大胆にやり出したのは一八三七年及び三八年の頃である。この事の根本的な継起となつたものは、一つには、彼が自分を小説家として意識し出したという事が確に關係しているが、もう一つには、ハイベルクとそのサークルの有力な一人ヘアツ *Henrik Hertz* (1798—1870) の方に不幸な事件がおきたことが深く關係している、と言われている。その事件と云うのは、当時アンデルセンと非常に親しい關係にあつたドゥレウセン *Louise Drewsen* (アンデルセンと同時代) の言葉によると、アンデルセンはその一八三八年の春に國家から補助金を一年に四〇〇リクス・ダラー支給されることになり、貧しいアンデルセンの經濟生活に完全な獨立の保証が与えられたのであるが、ハイベルク達の方はこの支給をうけられなかつたという出来事なのである。ブランドによると、この事件は確にアンデルセンをしてハイベルク・サークル攻撃の拳に出るきつかけをつくつた、と言うのである。<sup>(註8)</sup>

それでは、その攻撃はどんな方法でなされたのであろうか？ それは童話によつてであり、アンデルセンは、彼の童話の中で、ハイベルク・サークルのメンバーを、或は動物に、或は人物に、或は物品に仕立て、それ等を諷刺するようその童話を仕組んだのである。アンデルセンの研究家ハンス・ブリックス *Hans Brix* (1870—) はその事情を詳細に語つており、彼の研究によると一八三八年秋に出版された“*Fysitkerne*”「マッチ」や同じこの年に出版された“*Nattergalen og Spilledasen*”『夜鶯とオルゴール』(その後この題名は変えられ“*Nattergalen*”『夜鶯』となつている) は明らかにハイベルク・サークルの諷刺童話であるとしており、それ等の中の登場人物、動物、物品等の分析を行つている。<sup>(註9)</sup> 私はアンデルセンの諷刺的手法を見るために、そしてそれを通してハイベルク・サークルとの彼の關係を詳細に知るために、後者の『夜鶯』をこゝで取り挙げて見よう。



先ず童話の筋を述べよう。場所は中国の皇帝の立派な御殿。その御殿の内部はすべての物が最上の陶磁器で出来ている。それ等はお金が非常にかゝつてゐるが、壊れ易く、うつかりさわると壊れるから人々はよく注意して歩かなければならない。さて、この御殿は建物も庭園も壮大華麗なので世界中に有名で、外国から沢山の人がこの都を訪れ、御殿へやつて来る。そして誰もこの御殿を見て驚歎するのであつた。然しこの御殿には一つの最高最上の名物があつた。ところが不思議なことに皇帝も高位高官の人々もそれを知らないのである。その名物とは、この大きな庭園の中の湖のほとりの森に一羽の夜鶯が住んでおり、美しい声で鳴くのである。こゝへ来た外国の人々はこの声を聞いては、これこそこの御殿の最高最上のものであると思ふのであつた。皇帝に仕へる高官の一人が或る日、この御殿を訪問したらしい外国人によつて書かれた外国の書物の中でこの事をはじめ知るのである。皇帝にこの事を伝えると皇帝はすぐその声を聞きたいと言ひ出す。然し高官達はその事を書物で知つたゞけで未だ実際には聞いたことがなく、又庭園は広いのでその夜鶯が何処に居るのか皆目わからず、思案にくれるが、御殿に仕へるあらゆる人間をしらべたあげくやつと一人それを聞いたことのある者を見つけ出す。それは台所に仕へている親孝行で非常に貧乏な小娘である。彼女だけは、毎晩家へ帰る途中でその声を聞いており、その場所を知つてゐる。いよいよ彼女が皇帝一行をそこへ案内する。皇帝はその声を聞き、非常に感動し、はじめて涙というものをこぼす。その夜鶯はそれ以後皇帝のなくてならないお気に入りのお宝となり、御殿の中に住わせられる。この評判は都中にひろまる。然し或る日この皇帝に日本の天子様から贈物が送られて来る。それはオルゴールの夜鶯である。然しこの夜鶯は本物のあの夜鶯とは又ちがつた素晴らしい声を出す。皇帝及び高官達の心はたちまちこのオルゴールの方に移つてしまふ。皇帝はこのオルゴールを都の人々にも見せ聞かせてやる。今やすべての人々の心がこのオルゴールの美声にうばわれてしまふ。皇帝は

宮廷楽長を呼び、本物のあの夜鶯の声とこのオルゴールの夜鶯の声とどちらが優れているかを判定させるため、この両夜鶯に競演をやらせる。宮廷楽長はオルゴールの方がずっと優れて美しいと判定する。彼は非常に博学な人であるため、このオルゴールの夜鶯の優れた価値について二十五巻もの書物を書いてそれを証明する。これがためその時から本物のあの夜鶯は国外に追放される。ところが或る日皇帝は重病にかゝる。死神が皇帝の前にあらわれ、皇帝を悩ましつゞける。皇帝はうなされ続け、必死の声をしぼつて音楽々々と叫びつゞける。然しこの時そのオルゴールはプツンというバネの切れる音をたて最早使い物にならなくなる。病状はますます悪化する。この時あの追放された夜鶯が皇帝の声をきゝつけ窓の外の木の枝のところへやつて来て、美しい声で鳴き出す。皇帝はたちまち平静にもどり、まさかと思うその病いから癒える。皇帝はその夜鶯に心から喜び感謝し、夜鶯に御殿にずっと住んでほしいことをたのむ。夜鶯はたつた一つのことだけ皇帝にお願いして、窓の外の木の枝のところへ毎日飛んで来て鳴くことにする。そのお願いとは、自分のことを誰にも言わないで呉れ、というのであつた。御殿の人々は皇帝はもう死んだのだと思ひ翌日朝早く、その死体をおがみほど寢室へ入つて来る。ところが皇帝はすっかり健康になつていて皆に向つて「お早う！」という。

以上が全体の筋であるが、アンデルセンの諷刺はどうなつているのであるか。ハンス・ブリックスによると、この宮廷楽長こそハイベルクであり、オルゴールの夜鶯はヘアツであり、この自然の本物の夜鶯こそアンデルセン自身ということになる。この見方は全く正しいと思う。先ずこの御殿であるが、その内部はすべて最上の陶磁器で出来ていて、それ等にはお金が非常にかゝつており、而も壊れ易く、うっかりさわると壊れるから、人々はよく注意して歩かなければならない、とあるが、これはそのままハイベルク・サークルの一团を諷刺したものである。彼等は大学

出の思想貴族達で、頭をひねって作り上げた厳密な理論体系、而もそれを住家としながらこの住人以外のものにはイロニーをふり廻す。アンデルセンのような貧乏で卑弱な思想の人間には薄氷をふむ思いで彼等と交際しなければならなかつたのだらう。又オルゴールの夜鶯の方が自然の夜鶯よりすぐれていることを証明するために二十五巻の書物を書いた博学の宮廷楽長は正しくハイベルクである。アンデルセンはこの楽長について次のように説明している。「楽長はこのオルゴールの夜鶯について二十五巻もの大きな書物を書きました。この書物は非常に学問的で而も長く、その上むづかしい漢字がぎつしりつまっていました。それなのに読んだ人は誰も彼も、分りました、と言っていました。なぜなら、もしそう言わないと、馬鹿にされて、お腹をうたれてしまうからです。」又あの競演の判定の時に楽長に次のように言わせている。「この（オルゴールの）夜鶯の拍子はとりわけ正確であります。私の流儀にびつたりと合っております。……」

陛下並びに諸君！ 何故ならば、本物の夜鶯の方は、何を歌い出すのか、私共は予めこれを知ることが出来ないからであります。けれどもオルゴールの方は、総べてが整然と定まっております。ひとたびこうと定まれば、一切がその通りに進行致すのであります。それは私共によつて説明の出来るようになっております。この中を開けて、ワルツがどのように納まつているか、又どの様に動くのか、を人々に説明して解らせることが出来ます。更に、どの曲がどの曲の次に出て来るのかという順序までも知ることが出来るのであります。」

この他に諷刺してある箇所はいくらでも見出せるのである。そこでアンデルセンがハイベルク・サークルを攻撃する内容をよく検討して見ると次の二つになると思う。第一は、厳密なる理論体系とイロニーをふり廻す風潮に見える不自然性であり、その非主体性である。第二は、彼等の思想の貴族性である。彼等は大学出の思想貴族であり、アン

デルセンは大学生としての資格を獲得はしたものの、大学出身族とは階級的・身分的に凡そ異つた貧乏人であり、然し貴族性の預り知らない自然性をもつていた。

ハイベルク・サークルへのアンデルセンの関係が右の様なものだとすると、そのメンバーの中でもとりわけイロニの振り廻しをやるキルケゴールによつて、アンデルセンはどんなに傷心したかど想像される。そしてキルケゴールがアンデルセンの諷刺の槍玉に上ることは目に見えて明らかであつたらう。

そこでいよいよ問題の童話 *Lykkens Galoscher* 『幸福のオーヴァーシューズ』を通して、アンデルセンとキルケゴールの関係を究明しよう。さて、この童話は、第一話、第二話という風につゞいて第六話まであり、一番問題となるのが第五話であるが、これも矢張り第一話に充分関聯をもつている。というのは、この童話全体がどんな問題をかゝっているかということは、第一話に出て来るこの童話で一番最初に「幸福のオーヴァーシューズ」をはいた弁護士にアンデルセンが語らせた言葉の中にはつきりと示されていると考えられるからである。「私は、昔のよい本を読むのが好きでしてね。しかし又近頃の新しい本も好きでよく読みますよ。但し『日々の物語』だけはいたゞけませんな。実際の毎日の出来事だけでもうけつこうですからな。」この文章だけを読むと何の変哲もなく感じるが、問題はこの『日々の物語』“*Hverdagshistorierne*” という書物の言及にある。この本はハイベルク・サークルの象徴とすら言えるギェルレンボーッ夫人の書いたもので、当時の時代精神の代表的な現われとされたあまねく人々に知られた評判の本であつた。アンデルセンはこのギェルレンボーッ夫人をきらい、又彼女のこの『日々の物語』もきらつたことを彼自身日記の中に書いて<sup>(註10)</sup>いる。このように、アンデルセンは、ギェルレンボーッ夫人の思想を真向から否定して、その否定と共に自らの思想を展開しているのが、この童話全体の性格なのであつて、この事は後に又触れるが実に重要な

点なのである。

さて「幸福のオーヴァーシューズ」というのは、これを履くとその人の心で願っていることが何でもかなえられてしまうという不思議なオーヴァーシューズである。問題の第五話は警察の書記の話しになつてゐる。この書記は詩人の境遇がうらやましくて詩人になりたくて仕方のない男である。彼はふとしたことからこのオーヴァーシューズを履き、途端に詩人になつてしまふ。彼は詩人の境地に酔いながら美しい空を眺めている。たまたま空には雲雀が美しい声で歌つてゐる。彼は急に雲雀になりたくなる。オーヴァーシューズを履いたまゝの彼は途端に雲雀になつてしまふ。しかしこゝで困つた事が起る。この雲雀は男の子に捕らえられてしまふ。ところが偶々そこにやつて来た金持そゝうな二人の少年に買いとられる。二人は雲雀を家へもつて帰るが、その家は実に立派で、その非常に美しい部屋ににごに入れられて、おかれるのである。ところがその部屋には既に二つの鳥籠があり、その一つにはオウムが入つており、他の一つにはカナリヤが入つてゐる。このオウムは一度も鳥らしく鳴いたことはなく、一羽ぼつねんとその籠の中でぶらんこをしているのである。一方のカナリヤは絶えず美しい自然そのままの声で歌つてゐる。そこへもう一つこの雲雀の籠がおかれたわけである。そこで先きの二羽の小鳥の間に面白い会話が始まるのである。然し面白いことにこの会話はこの雲雀が聞きとり、解説し、読者に伝える、という方式になつてゐるのである。この事は実に深い意味がある。

私は、今この会話をこゝに紹介する前に、一先ず、この第五話の登場者達が何を意味しているのかを一応言及しておこう。ハンス・ブリックスは、この光景を指し、このカナリヤはアンデルセンであり、オウムはハイベルク・サークルのメンバーの誰かだと言註11う。しかしブランドは次のように言註12う。この立派な部屋はハイベルク・サークルそのもの

の、カナリヤはアンデルセン自身、オウムはキルケゴール、雲雀はヘアツである、と。雲雀がヘアツであるわけは、この雲雀はオーヴァーシユーズを履く前は警察の書記であり、それを履き詩人となり、そして雲雀となつたが、ヘアツは大学で法律科出身であり、而も法律の論文で金メダルをとり、当時の秀才であつた。而も尙ほ当時の流行の波に乗り、バッゲッセン Bagesen (1764—1826) の著作 “Gengangerbreve” (1820) 「幽霊の手紙」の筆記役をして著作家としての第一歩を踏み出したこの経歴から理解される。即ち彼を警察の書記にしたことは非常な諷刺である。然しやがて雲雀となつてオウムとカナリヤの会話の聞きとり、解読をやり、読者への伝達者の役をしていることは、ヘアツがもつている創造的ではないが、バッゲッセンの筆記役で示したすばらしい解釈能力を、アンデルセンが見ぬいていることも事実であるが、それを利用したことは更に大きな諷刺である。ヘアツはその雲雀の役をそのまま実践するかの様に翌年一八三九年 “Stenninger og Tilstande” (1839) 「気分と状況」という小説を書いたが、これは当時のコペンハーゲンの思想界の人物の生活交流そのままを小説にしたもので、これにはアンデルセンもキルケゴールもふくまれ、ヘアツの解釈能力のすばらしさがこれによつて立証されたのである。

さて、二羽の小鳥の会話を聞くことにしよう。我々はそれによつてブランドの推測の正しさを実証的に知るであろう。先ずオウムであるが、オウムはいつもその立派な部屋にある鳥籠の中の輪にとまつてぶらんこをしている。このオウムは一度も鳥らしい自然そのままの声を出して鳴いたことはないが、その代り唯一つだけ人間の言葉がしやべれた。それは時によると全くおかしくひどいた。その言葉というのは “Nej, lad os nu være mennesker!” 「ふんえ、さあ人間になりましたよ！」というのであつた。さて、このオウムにカナリヤが話しかける。「わたしは緑の棕櫚の木や美しく咲いた巴旦杏の間を飛び廻りました。わたしは、兄さんや姉さん達と一しよに美しい花の上やガラスの様

にすぎ通つた湖の上を飛び廻りました。湖の底には水草がゆらいでいました。わたしは又、沢山の美しいオウムに会いました。そのオウム達は面白い話をしてくれました。とても長々とそしてとても沢山。」そこでオウムは答える。

「そのオウム達は野育ちの鳥だったのでしよう！ 教養というものがありませんよ。いゝえ、さあ人間になりますよ。う！——何故あなたは笑わないのですか？ こゝの奥さんやほかの人達は、わたしがこう言うと、皆笑つて下さるが、その時でなければあなたは笑わないですね。ユーモアを解さないことは大きな欠陥ですよ。さあ人間になりますよ。う！」カナリヤは言う、「ねえ、あなたは、花の咲いた樹のそばにテントを張つて、その樹の下でダンスを踊つていた美しい娘さんたちのことを覚えておられるでしょうね。そして自然そのままに繁茂している草の甘い実や、冷い汁のことも覚えているでしょうね！」オウムは答える、「えゝ、覚えておられますよ。だけどわたしにはこゝの方がずっとよいと思いますよ。おいしい食べ物はあるし、大事にしてくれるし、わたしは、自分が頭がいゝなあとお思います。そしてこれ以上の何がほしいのですか。さあ人間になりましたよ！ あなたには、俗に言う詩才というものがありません。わたしには、しつかりした知識と智慧というものがありません。あなたは天才ですが、分別というものがなくて、何の制御もなく高い声をはりあげるから、そのように籠の上から布をかぶせられてしまつたのですよ。然しわたしはそんな目には合いませんよ。何にしるわたしにはとてもお金がかゝつておられるのですからね。わたしはこの嘴一つで人に感動を与えるのです。そして又、ヴィツ、ヴィツ、ヴィツと鳴くことも出来ます。（ヴィツは機智という意味、従つて機智、々々、々々と鳴く意味を指す）いゝえ、さあ人間になりますよ！」しかしカナリヤは歌い出す、「おゝ花薫る南のわが故郷の国よ、……わたしは、お前の緑深い森を、その樹々の枝々がすみきつた水面とキスを交わす静かな入江を、歌いたゝえよう。沙漠のサボテンが生え出でているほりに、もえあがる兄弟姉妹たちの歡喜

をたゝえよう。」オウムは言う「そんな哀れな節をつけるのは止めてほしいですね。そんなことをしないで、何か人を笑わせることを言つてごらん下さい！ 笑いということは、精神が最も高度であることとしるしですよ。犬とか馬は笑いますか！ それ等は泣くことは出来ても、笑うことは出来ないでしょう。笑いは人間にだけ与えられているんですよ。ほ、ほ、ほ！ さあ、人間になりましょう！」カナリヤはこの時はじめて雲雀に向つて言う「あなた、灰色のデンマークの小鳥さん、あなたも亦とらわれの身なのですね。あなたのお国の森はきつと寒いでしようね。だけどそこには自由があるでしょう。飛んでお逃げ下さいよ！——この家の人はあなたの籠の戸を閉めるのを忘れていますよ。それに一番上の窓は開けつばなしになっていますよ、さあ飛んで行きなさい、早く。」こゝで雲雀はその言葉につられて籠の外へ出る。その時丁度猫が入つて来て雲雀を追い廻わす。カナリヤは籠の中でバタバタ飛び廻り、オウムも籠の中で飛び廻りながら「人間になりましたよ！」を叫びつゞける。雲雀は窓から外へ飛び出し、一軒の家に入る。そして何の気なしにオウムの口真似が出る「さあ人間になりましたよ！」と。途端に警察の書記になる。

さて、以上の様に引用されたオウムに関しプラントは次の三つの観点から、それが明らかにキルケゴールである、と看做している。第一は、先きに述べたヘアツの『気分と状況』の中に出て来るアンデルセンをモデルとした「アマデイス」とキルケゴールをモデルとした「翻譯者」の描写にこのカナリヤとオウムは全く合致していると言うのである。第二は、このオウムの外観はキルケゴールのそれに全く一致していると言う。即ちこの童話にはオウムの絵が画かれているが、その絵はキルケゴールの印象そのままであること、オウムがヴィツ、ヴィツ、ヴィツと鳴いたり、ほ、ほ、ほ、と笑つたりするが、これはキルケゴールの生まの声であるとのこと、更に、キルケゴールを小鳥として描写する場合、オウム以外の何になぞらえることが出来るかということ、このような理由からである。第三は、何と言つ



てもこのオウムに課された性格とその思想である。これに関しては説明は不要であろう。兎に角ブランドはこの三つの点からこのオウムはキルケゴールの諷刺だと看做しているのである。我々もこの点に関する限りブランドの説に従つてよいのではあるまいか。ハイベルクの徒、然り、ハイベルクのスポークスマンのようなキルケゴールが、アンデルセンにはこの様なものとして感ぜられたことは、充分推測出来るのである。

さて、そこで問題は、このオウムと『いまなお生ける者の手記より』との間に関係があるかどうか、ということであるが、ブランドは次の二つの理由からその著作はこのオウムへの報復行為であると考え<sup>(註13)</sup>る。第一は、その著作のテーマ、内容は明らかに『幸福のオーヴァーシューズ』のそれに反論した形式にもなつてい<sup>(註13)</sup>るといふことである。即ちアンデルセンがこのオウムをして言させた一つの言葉“Lad os nu være mennesker!”「さあ人間になりましょう!」はその『幸福のオーヴァーシューズ』のテーマであるが、これは正しく『いまなお生ける者の手記より』のテーマであること、而もアンデルセンは、このテーマの思想的展開をはかるにあつて、ギェルレンボーウ夫人の『日の物語』の根本主想を否定することを通じて行つたが、キルケゴールのその著作は丁度これと正反対で、ギェルレンボーウ夫人のその『日々の物語』の主想によつてアンデルセンを酷評しながら、あのテーマの思想的展開をはかつたこと、更に、その著作の中には明らかにオウムの発言への返答と見られる箇所が沢山見出せるということ、なのである。第二の理由は、アンデルセンの自伝の記事に基くのである。「小説『しがない胡弓弾き』はしばらくの間わが国の高度な天賦にめぐまれた一人の青年の心をとらえていた。その青年とはS・キルケゴールである。私は彼と街路上で出会つたが、その時彼は、この小説についての批評を書こうと思つてい<sup>(註13)</sup>ること、そして私とその批評を、他の人々の既になされた批評よりも、きつとより満足するだろうということ、を私に語つた。とい

うのは、彼は、人々が私を全く違つて理解している、と認めていたからである。——やがて永い時が過ぎた。キルケゴールはこの小説を再び読みかえしたろう。そして最初のよい印象は消えてしまつたのだらう。彼はこの小説の詩的なものを真剣になつて考究すればする程、その詩的な誤りに満ちてくることを知つたに違いない。その批評は私のところへ送られて来たが、私はその批評を喜ばなかつた。それは一冊の単行本になつていた。先ずキルケゴールは、何かとても読みづらい書き方をしており、ヘーゲル的な重苦しい表現法を用いていた。人々は宜談に、この本を通読するのはキルケゴールとアンデルセンだけだらう、と言つてもいた。その本は『いまなお生ける者の手記より』であつた。私は、その時、その本から、自分は決して詩人ではなく、自分の仲間から姿を消している詩人的影像であるといふこと、そして、私を詩人の中に認めてくれるか、或は、キルケゴールが私の補足をそれによつてやつてくれた詩といふものの影像として私を利用するかは、来るべき詩人達に委ねられているということを知つたのである。やがて後になつて、私はこの著者をよりよく理解したのである。彼は私が進歩するために、友情と深い思慮から私に不平を述べたのである、<sup>(註14)</sup>と。ブランドは、アンデルセンがこの最後に書いている言葉、つまりキルケゴールのあの攻撃的批評は友情と思慮からだとなしている部分を決定的理由と考へない。そして、アンデルセンがキルケゴールに街上で出会つた時期と「永い時が過ぎた」といふ言葉を重要視する。その期間に最初の構想がかわつてしまつたというアンデルセンの推測をとりあげる。そして、その期間に『幸福のオーヴァーシユーズ』が刊行され、それをキルケゴールが読んだことを、キルケゴールの日記の記事から推定する。

ブランドの説を一言にして言うならば『『いまなお生ける者の手記より』の中には、心理学的に見て、客観的な文  
学的動機が全く見出されないこと』<sup>(註15)</sup>であり、その動機は明らかに『幸福のオーヴァーシユーズ』を読んだことにあり、

キルケゴールを怒らせたものは、アンデルセンがキルケゴールをハイベルクのオウムにしてしまったこと、彼の思想を貴族性として攻撃したことにある、<sup>(註16)</sup> という事になる。

以上しばらくの間プラントの説を中心としながらこの著作の外面史的背景を究明して見た。プラントの見解及びその究明の仕方は何人も及ばない程綿密詳細をきわめている。この外面史的背景の研究に関する限り、プラントに否定の言葉を投げかけることは殆んど不可能であろう。にも拘わらず彼に堂々と真向から否を叫ぶ学者がある。それがヒルシュである。而もヒルシュはデンマーク人でなくドイツ人である。このドイツ人にどうしてデンマーク人の歴史的背景の研究を否定することが出来るのだろうか。而もヒルシュはプラントと違つてこの著作を全く重要視する唯一の学者であることを考えると、我々はヒルシュの見解を研究する重要性がますます増して来るのを感じる。

## 2 内面史的背景

ヒルシュの基本的見解は、この著作成立の理由を、アンデルセンとキルケゴールの個人的関係の中には決して認めず、それをあくまでキルケゴール自身の内面史に關聯づけて見出そうとするのである。

先ずヒルシュのプラント批判からはじめよう。ヒルシュの主張は次の通りである。確かにアンデルセンの多くの童話が諷刺的方式をとつてゐることは認められる。そして恐らくこの『幸福のオーヴァーシューズ』のオウムはキルケゴールであると考えられよう。然しだからと云つて、この『いまなお生ける者の手記より』がその諷刺への復讐行為であることと認めることは出来ない<sup>(註17)</sup> と言ひ、三つの理由を挙げている。第一はキルケゴールの日記の記事についてあるが、この『幸福のオーヴァーシューズ』が刊行された一八三八年五月十九日以降の日記には、彼がこれを読んだとい<sup>(註18)</sup> う記事はいさゝかもなく、又これを読んだことによつて起つた心理的狀態を示すような記事も全然見出され<sup>(註18)</sup> ない、と

いう点である。第二は、アンデルセンの前述の日記的自伝の記事に関してあるが、アンデルセンがキルケゴールと街上で出合い会話を交わしたあの時期を、「永い時が過ぎて」というあの言葉と合せ考えて、その「永い時」を四、五ヶ月とするならその会話を交わした時期は少くとも四月以前ということになり、「幸福のオーヴァーシニューズ」出版の以前となり、キルケゴールはこの出版とは無関係に彼の著作を書きはじめた、となす。そしてヒルシュは、親しい人間の間で約束をしておく文学批評というものが文学的処刑という形をとることはよくあるものだと<sup>(註19)</sup>なしている。

第三は同じくこのアンデルセンの記事にある彼の発言そのものに関してある。ヒルシュはプラントによつてあつさり素通りされているその記事のアンデルセンの言葉、即ち彼にキルケゴールはその著作を友情と深い思慮から書いたのだとなし、やがて後にキルケゴールをよりよく理解することが出来たと感謝の気持を示しているその言葉を指し、キルケゴールが投げた攻撃的酷評に対して、アンデルセンは当然怒つて然るべきなのにこの様に感謝をしていることは、その著作があつた復讐行為でない何よりの証拠で、その著作にはアンデルセンに決定的な感動を与える何かがあつたからである、とな<sup>(註20)</sup>している。ヒルシュはこの様な仕方、プラントが自説の拠り所としたアンデルセンのあの自伝の言葉から、プラントとは全く反対の結論をひき出し、プラントの説を受容れ難いとしている。そして言うのに「キルケゴールはその先述の期間の数ヶ月はそんなに無害な諷刺童話にかゝらつて、それをこねくり廻しているのとは全く別の事柄に関わつていたのである、<sup>(註21)</sup>」と。

それでは、その別の事柄とは何であるか？ そのものこそ、あの攻撃的酷評の故に当然激しい怒りに駆り立てられて然るべきアンデルセンに、その憤激を乗り越えて、その心髄に決定的に刻印した感動であり、このものこそその著作を書かせた根本的素因であり、それはキルケゴールがその頃体験していた彼自身の内面史である、とヒルシュは言<sup>(註22)</sup>

う。

そこで一八三八年の頃のキルケゴールの内面史が問題となるわけであるが、それを構成するものを究明するため、一八三五年位まで遡つて、その頃から一八三八年までの内面史的経過を辿つて見ようと思ふ。

一八三〇年秋コペンハーゲン大学の神学部に入學した彼は、一八三一年秋頃から神学研究と取組み、日記によると一八三五年の秋を神学試験の時機にあてがつたらしく、その六月には神学試験準備をしていたことが記されている。<sup>(註23)</sup>

ところが、丁度その頃の彼は、オーソドクス神学とも合理主義神学とも訣別したばかりなのである。従つてその七月、八月の休暇は、彼自身に、彼の内面的状況の曖昧さはつきり気づかせ、彼がどうしても自ら決定的な内的決断をせざるを得ない状況へと彼を追い込んだのである。彼が有名な主体性の真理を見出した夏期休暇とはこの時のことなのである。しかしその彼の内的状況は彼をしてその神学研究を意識的に中断せしめたわけである。<sup>(註24)</sup> この時の彼の内的

状況を一言にして言うならば、ヒルシュもガイスマールも認めている様に、キルケゴールが罪と悔改めについてのキリスト教の思想に非常な憤慨を覚えた時期なのである。<sup>(註25)</sup> 文学研究に關して言うならば、一八三五年の春彼が熱心に

研究していたものは、ドン・ジュアン、永遠のユダヤ人、ファウスト等であつた。そしてこの時期こそロマンティックとヘーゲル主義とがキルケゴールにとつて問題となつて来た時期である。又以上の事と並んで政治問題が彼をとらえた。一八三五年十一月の講演や一八三六年春の新聞記事は、キルケゴールが危険な天賦をもつた保守的ジャーナリストに成りつゝある者たることを如実に示すのである。一八三六年四月から七月までの間は、彼の精神生活に全くの転換が行われた時期で、恐らくキリスト教的に見るならば、墮罪的な放縱生活が行われたことが想像される。<sup>(註26)</sup> 換言するならば、この時彼は最早キリスト教の客観的真理に自らをしばることなく、前年一八三五年の夏休みになした決定

的な決断に基き、主体性の真理の実験を肉的生活の自由という形で遂行したと考えられる。

然し、この時期を経て、彼が再び我々の前に現われて来たときは、たとえ立場そのもの、根本的変化は目に見えなくとも、最早以前の彼ではなく、正に絶望の中に硬直している彼、世間というものとの関係に於ては全く打ち滅ぼされた人間として立つていたのである。<sup>(註28)</sup>そして彼は全く新しい分野の研究をやり始めたのである。我々は彼が一八三七年の始め頃から再びキリスト教へ接近しはじめたことを知る。しかしそれは単なる直接的接近法ではなく、弁証法的な接近法によつてであり、而もその弁証法はキリスト教と彼の共通の運命として彼にとりついでることを彼は知らされるのである。彼はキリスト教の諸概念、その気分内容について考えはじめたのである。<sup>(註29)</sup>彼は、キリスト教によつて、ロマンティック・イロニーへの彼の絶望と、孤独とを追放する生の可能性が与えられることをはつきりと知つたのである。<sup>(註30)</sup>この様にして彼は説教者になろうと心に決める。<sup>(註31)</sup>そして再び神学の講義を聞き始める。

にも拘らず、その時の彼においては、あの弁証法的運命の方が、その時彼に理解されていた限りのキリスト教よりもより決定的な力をもつて彼をとらえて居たのである。ヒルシュは言う「キリスト教へのその様な接近は、時代精神に抗して、興味深い立場をもたらす弁証法的可能性との戯れ以上のものではない。即ちその接近を通じて、弁証法的可能性の方が彼をとらえてしまうことを予感し、しかし同時に、それによつて彼が不安にとらえられてしまうにちがいないことを予感するところの、弁証法的可能性との戯れ以上のものではない。」<sup>(註33)</sup>と。この精神的状況はガイスマールが言うように *Angsten for det gode* 「善なるもの前での不安」<sup>(註34)</sup>であり、この時期のキルケゴールはヒルシュも言う様に、改心しようとする心と神の前から逃亡しようとする心によつて分裂しつゞけ、絶望はますます深まつていたのである。<sup>(註36)</sup>しかしこの時、キルケゴールは、彼の生涯に於ける第一回の真の神経験をする。<sup>(註37)</sup>即ち彼は一八三七年五月知

人の家でレギーネ・オールセンを知るのである。しかしその神経験は、二人の恋愛感情の延長線上に仮定される言葉で言いつくされない神として経験する神ではなく、レギーネに対する愛情をキリスト的愛にまで高め純化しようとするその過程の中で、その故にこそ、彼女に対し、彼女を通し、自らの罪と負い目の決定的な意識をもつという仕方での、神との出会いである。即ちその神は彼の生そのもの、破壊者として働き給うことを彼は知るのである。<sup>(註38)</sup>一八三七年の主たる事件は、このほか彼が父親から、父親自身の秘密であつた罪を聞かせられる。この様にして彼は全く「絶望」の人となつて行つたのである。

一八三八年は、彼に生活と思想と共に、決定的な転換を与える年となる。「絶望」はますます深まるが、それは最早可感的なもの、情感的なもの、センチメンタルな憂愁という種類のものではない。全実存的なものである。彼に「絶望」を与えるものはキリスト教であり、又それを救う働きをするのもキリスト教であつた。このようにして彼は絶望の深まりと共に、それと闘う力をもち始めた。一八三八年一月一日の日記は、自分の今までの絶望との闘いから得られた一つの経験と言えよう。「イロニーとは異状な仕方の発展を意味する。それは丁度シュトラスブルクのガテウの異状に発達した肝臓のように、当人を自壊させて終るものである。<sup>(註39)</sup>」この年、三月十三日には大きな出来事がおこる。恩師ポール・マルチン・メーラーが死ぬのである。しかし五月十九日の日記には、所謂有名な「何とも言い知れぬ喜び」の宗教的体験がおこる。ところがすぐ不幸は待つており八月八日彼の父は死ぬのである。

さて、ヒルシュはこれ等一連の出来事との関係に於けるキルケゴールの内面的・精神的状況の中に、彼の著作成立の根本理由を見ている。彼は次の三つの理由を挙げてゐる。第一に、キルケゴールは、メーラーの死に際し、今や内的にも外的にも決定的な絶望と孤独の中につき落されたことによる。頼るべき恩師は死に、又父親とは昔の様な関係を

保つてはいない。彼は内的にも外的にも全く独りで立つて行かなければならぬことを知らされる。彼の日記は、その頃、最早彼は何も手につかなくなつたことを語っている。然し、四月に入るとすぐ、彼は自らがメーラーの学徒らしく、師が切開いてくれた一つ分野、即ち文学批評というものを始めようと考えるようになり、その題材としてアンデルセンの『しがない胡弓弾き』を選んだのである。<sup>(註40)</sup> というのは、ヒルシュの推定によると、キルケゴールはその小説に非常に強い反対を感じながらも、而もこの小説の気分と態度の中に、自らの「絶望」と同じものを即ち同類者の絶望を感じていたからなのである。<sup>(註41)</sup> しかしこの絶望の共感は、その同類者への絶望という形であらわれたのである。というのは、その時のキルケゴールに於ては、絶望は、キリスト教の支配内に下り、その弁証法的規定のもとにあつたので、即ちその絶望は内面性に於ける闘いの対象としてあつたからなのである。そしてヒルシュは、友情によつて行われたその論述があのように激情的な反撥という形をとつたのも、そのためであるとなしている。そこで第二の理由として、この時期に於けるキルケゴールのキリスト教に対する関係を挙げてゐる。即ちヒルシュは、この時期にキリスト教への態度の決定的な転換が行われたことを指摘している。つまり五月十九日の有名な「言い知れぬ喜び」の経験が起り、又七月九日の日記には、はじめて「祈り」が書きつけられてある。<sup>(註42)</sup> 第三は、八月八日の父親の死が明らかにこの著作の標題に關係を及ぼしている事実である。この事實は、この著作がその成立理由をキルケゴールの内面史にもつている最後の例証になるわけである。

以上、私はヒルシュの線に従つてキルケゴールの内面史を記述して来たが、ヒルシュの見解を一言にして言うならば、キルケゴールの内面性に於ける絶望との闘いが外面化され、アンデルセンとの關係に於て演ぜられた、と見るわけである。



目 結 論

さて、我々はこの二つの全く相反した代表的見解をどう理解したらよいのであろうか。私なりに問題をひろつて見よう。先づブラントの見解に就いてあるが、彼はさすがにデンマーク人である故に、デンマーク人にだけわかるデンマークという最小国のコペンハーゲンという小都市の特殊事情を実に適切に而もまるで嗅覚に訴えるが如く生々しく描写している。我々は、その描写を読むとき、まるで、その当時のコペンハーゲンとアンデルセンとキルケゴールが一幕の舞台風景のようにこの場にとび出して来ているように感ずるのである。にも拘わらず、ブラントが、この著作の成立の根本動機を、単に歴史的背景の中にだけ探り、キルケゴール自身の実存的理由には全く見むきもしない点は、確に欠点だと思ふのである。歴史的事実と実存的内面性との関係は一体どうなのであろうか。この様な歴史的背景が、あの時期にあのような形で著作となるためには、そこには、キルケゴール自身の実存的・内面的理由があつたからではなからうか。そこでヒルシュの問題であるが、彼がブラントの見解を批判した点は確に正しいと思う。しかしその理由を只管実存的理由にだけ求め、キルケゴールのアンデルセン攻撃のあの激しさまでも、友情と内面史の故とすることは、少し無理であり、「実存」の質的差異を強調し過ぎる余りにも公式主義的な見方ではなからうか。ヒルシュのその比類ない著作の中には、私の小さい経験からしても、人間キルケゴールというものが、即ち、デンマーク人キルケゴールというものがその存在を全く許されていないのである。これはヒルシュの諸著作を読むにあつて、見逃してはならない事実である。このように考えて来ると、我々日本人のキルケゴール研究の視点が、このヒルシュのそれにも強く影響されていることを知らされるであらう。

そこで次にこの著作成立の根本理由に関する私の見解を述べることにしよう。私は、キルケゴールのいづれの著作にも常に二つのモーメントが働いていると考える。例えば、『あれか——これか』を例にとつて見てもわかるが、あれを書かせたものは明らかにレギーネとの関係であろう。にも拘らず、単にレギーネの関係だけと規定するなら大きな誤りである。キルケゴールは、『わが著作活動の視点』に於て、『あれか——これか』の著作の目的は宗教的伝達のための美的術策であることをはつきり述べているのである。このように常に二つのモーメントが働いている。そしてその二つは、或る著作に於ては弁証法的二重性となつてゐるが、又或る著作に於ては、必ずしもそうなつてはいない。『いまなお生ける者の手記より』にも明らかにこの二つのモーメントが働いていると考えられる。ブランドもヒルシユもそのモーメントを一つにだけ見ようとしたところに共通の欠点がある様に思われる。そこで私は一つのモーメントとして歴史的背景を充分認めるのである。ツローエルスルン、ブランドス、そしてこのブランドというこの三人のデンマーク人の見解を綜合し、又私の小さい経験から見て、デンマークという最小国のコペンハーゲンという小都市のあの特殊事情は、而もそれが十九世紀初期の事であつて見れば、疑いをいれない事実であると思う。即ち、キルケゴールの行動の一つ一つが、アンデルセンの行動の一つ一つと関係なしに営まれたとは到底考えられないのである。彼等の間には網の目のような、而も見えない力学的関係があつたであろう。従つて『幸福のオーヴァーシュエズ』がキルケゴールの目に入らなかつたなぞとは到底考えられない。否、事態はもつと深刻で且つ広い幅のものであつたらう。その童話はその事態のほんの一つの現われに過ぎないのではあるまいか。ハイベルク・サークルの生み出した独特のムードの中で、同調者も反対者も明け暮れ生活していたに違いない。——たとえその数は少ないとしても、事態は、ブランドが記述したもの以上のものであつたらう。

然しそのようなムード中に如何なる仕方でも参与しているかということとは、全く個々人の実存的理由によると思われる。キルケゴールにはキルケゴールの深い内面的な実存的理由のもとに、そのような明け暮れをしていたにちがいない。この実存の根は、否、この実存的神経は何ものにも優つて敏感であつたらう。アンデルセンの童話にこの実存的神経がふれて、猛然と叫び立てないわけがない。

私は今敢て二つのモーメントに分け、歴史的側面と実存的側面としたが、この二つは、理論的には綜合不可能であるが、「人間キルケゴール」の中では、自分でも気づかない程に一つのものとなりきつていたにちがいない。

さて、この事実を容認すると、それは、この著作の根本思想を研究する方法の上に決定的な影響を与える。即ちこの著作に於けるキルケゴールのアンデルセン批判の内容は、確かに「しがたない胡弓弾き」の中に見られるアンデルセンへの批判であると共に、それは同時に「童話」の中に見られるアンデルセンへの批判を含んでいることになるのである。この事は、あの二つの童話から見ても明らかのように、「反ハイベルク作家アンデルセン」への批判ということになり、この事は、当時のコペンハーゲンの精神的状況から見れば、「反ヘーゲル作家アンデルセン」への批判ということになるのである。キルケゴールが自分の処女作品を、反「反ヘーゲル」という線で、つまり、明らかにヘーゲル擁護という線ではじめたことは非常に興味深い。然し更に重要なことは、やがてキルケゴールは、ヘーゲル擁護者達に対して、このアンデルセンと同じようなことを、否、更にそれよりも激しい事を一生を賭けて言い且つ行動に示したという事柄である。

註1 Troels-Lund: Bakkehus og Solbjerg. Træk af et nyt Livssyns Udvikling i Norden. III. Kjøbenhavn. (1922). S. 216.

註2 Ibid. S. 216.

- 註3 Georg Brandes : Samlede Skrifter II. Kjøbenhavn. (1877). S. 272—273.  
 註4 Ibid. S. 273.  
 註5 Frithiof Brandt : Den unge Søren Kierkegaard. København. (1929). S. 123—153.  
 註6 Ibid. S. 129.  
 註7 Ibid. S. 130.  
 註8 Ibid. S. 130.  
 註9 Hans Brix : H. C. Andersen og Eventyr. Kjøbenhavn. (1907). S. 149.  
 註10 F. Brandt : Ibid. S. 131.  
 註11 H. Brix : Ibid. S. 150.  
 註12 F. Brandt : Ibid. S. 131.  
 註13 Ibid. S. 136. S. 144—146.  
 註14 H. C. Andersen : Mit Livs Eventys. Kjøbenhavn. (1859). S. 170.  
 註15 F. Brandt : Ibid. S. 144.  
 註16 Ibid. S. 126.  
 註17 E. Hirsch : Kierkegaard=Studien. I. Gütersloh. (1930). S. 52.  
 註18 Ibid. S. 52.  
 註19 Ibid. S. 53.  
 註20 Ibid. S. 53.  
 註21 Ibid. S. 52.  
 註22 Ibid. S. 53.  
 註23 Papirer. IA 72.  
 註24 Papirer. IA 75. IIA 807.  
 註25 E. Hirsch : Ibid. S. 32. Eduard Geismar : Søren Kierkegaard. Hans Livsudvikling og Forfattervirksomhed. I.

København. (1926). S. 32—33.

- 註26 Ibid. S. 33.
- 註27 Pap. IA 333.
- 註28 E. Hirsch : Ibid. S. 33.
- 註29 Pap. IIA 30.
- 註30 Pap. IIA 24.
- 註31 Pap. IIA 1.
- 註32 Pap. II. C 12.
- 註33 E. Hirsch : S. 33.
- 註34 E. Geismar : Ibid. S. 52.
- 註35 Pap. IIA 66.
- 註36 E. Hirsch : S. 34.
- 註37 Pap. IIA 67. 68.
- 註38 E. Hirsch : Ibid. S. 34.
- 註39 Pap. IIA 682.
- 註40 E. Hirsch : Ibid. S. 54.
- 註41 Ibid. S. 54.
- 註42 E. Hirsch : Ibid. S. 36. Pap. IIA. 231.